

## 湊 晶子教授のご退任にあたって

守 屋 彰 夫

湊 晶子教授は、1999 年 4 月に東京女子大学に赴任され、2 年間勤務され、2001 年 3 月にご退任された。わずか 2 年間のご勤務であったが、先生ご自身が「人生の総決算とも言える貴重な二年間」であったと述懐されておられるように、年数以上の大きなお働きをなさり、学生のみならず、教職員へも多大の影響を残されたことは周知のことであろう。殊に最後の 1 年間は機構改革により新しく発足したキリスト教センターの初代センター長として、文理学部宗教委員長として、大学評議員として、キリスト教教学研究室主任として、縦横無尽のご活躍をされた。時あたかも大学改革の議論が進行し、学内が喧喧諤諤とした状況にあったが、ご自身のお立場とご自身の大学改革への熱い思いとの板ばさみで悩みは深かったようであるが、最後まで情熱を失わずに個々の問題に誠実に取り組まれた。その姿勢の淵源を辿れば、やはり先生がこの東京女子大学の卒業生であることに辿り着くように思われる。

先生は 1951 年に入学し、1955 年に東京女子大学文学部社会科学科をご卒業され、助手として勤務された。1956 年にフルブライト大学院奨学生としてアメリカに渡り、1960 年にホイトン大学大学院を修了し、新約学で神学修士号を取得され、引き続きハーバード大学神学部特別研究生として、初代キリスト教史の研究に携わられた。このように研究者として順風満帆の出発ができた背景には、先生の生得の才能にもよろうが、それを開花させた当時の東京女子大学の教育も大きく与っているように思われる。又、東京女子大学の三代目学長の石原 謙先生が先生のご両親の恩師でもあられた関係で、個人的にもご指導を賜わる機会があり、本当の学問のあり方について若い時から自然に体得する機会に恵まれたことも幸いしただろう。この石原先生との出会いや学恩については、先生ご自身の筆による「歴史神学者石原 謙先生の薫陶を受けて」（『東京女子大学学会ニュース』2001 年 3 月 1 日号）に詳しく書かれているので参照されたい。

アメリカ留学からの帰国後は、東京基督教短期大学、その四年制大学へ移行した東京基督教大学を中心に、長い間、キリスト教史、新約学を中心に教育研究に携わってこられた。1964 年から 1 年間、NHK 教育テレビ英語会話の講師をも勤められた。また、国際基督教大学の男子寮及び女子寮のファカルティ・アドバイザー（この制度は学園紛争後廃止される）として、混乱期にある学生達の指導に親身に当たられた。

その間に発表された多くの学術論文の中から 1970 年代の代表的なものを列举してみると、「帝政ローマ下におけるミトラ教とキリスト教」（東京キリスト教短期大学『論

集』[以下『論集』として言及]第5号、1973年2月)、「古代ローマ本来の宗教意識と初代教会が受けた迫害との相関」(『福音主義神学』第6号、1975年10月)、「国家権力に対するキリスト者の取るべき態度に関する聖書の教えと実践」(『論集』第8号、1976年2月)、「ピレモンへの手紙と解放奴隷の実態」(『論集』第11号、1979年4月)、「ローマにおける自由人と奴隷の実態—コリント人への第一の手紙7章21節とピレモン書の歴史的背景として—」(『福音主義神学』第10号、1979年11月)が挙げられる。最初の2篇は、古代ローマの基層宗教と新興宗教としてのキリスト教との関係を追究したものであり、後の3篇は、奴隷制社会に対するキリスト教の実践倫理と社会問題に焦点を当てている。

1980年代以降は、女性問題への視点から新約聖書への歴史学からのアプローチが目立ってくる。例えば、「教会史上の指導者と女性の働き I」(『論集』第12号、1980年3月)、「教会史上の指導者と女性の働き II」(『論集』第13号、1981年3月)、「女性解放の歴史に対する現代キリスト者の対応と責任」(『論集』第17号、1985年3月)が指摘できるが、この視点は学術論文よりもむしろ現代の女性へのメッセージを込めた著書の中でストレートな形で語られることになるが、両者相俟って湊先生の学問を構成している。

ご定年後の先生は、2001年9月から2002年3月まで、ハーバード大学客員研究員として招かれており、生涯の課題である初期キリスト教史の研究、資料収集にあたられるご予定である。その後は執筆を中心にご活動なさる計画であるが、定年をもって老後の生活を楽しむというような方向に向かわず、益々ご研究に情熱を燃やされているのは、何よりも先生の恩師である石原 謙先生の米寿の祝いのお言葉、すなわち、「わたしの研究はこれからです」、という言葉に生かされているからであろう。石原先生はお言葉通り90歳を過ぎてから『キリスト教の源流』と『キリスト教の展開』という大著を刊行された。私事にわたるが、筆者がたった一度だけこの石原 謙先生の聲咳に接する機会を得たのは、石原先生が大病から回復されて、日本基督教学会でご講演をなさった時で、その会場校が奇しくも東京女子大学であったのである。そういう訳で、湊先生の今後益々のご研究の進展を祈っている。このような時に、先生から前任大学の新設十周年に当たり、名誉教授第一号に選ばれたという知らせが届いた。心から祝福したい。

先生は、研究者としての側面と同時に、長い間、NGOの組織の一つであるワールド・ビジョンに深く関わり、外務省、国連などと連携しながら、人権の問題に取り組んでこられた。また文部科学省より宗教法人審議会委員にも再任されて居られる。これらの側面での活躍も期待されており、ご健康の許す限り、邁進されるであろう。

公のご活動を離れた家庭人としての先生には、二男一女の母、五人の孫の祖母という顔があり、休日には孫と遊ぶ暖かい家庭人の姿がある。エネルギッシュな先生の多方面での益々のご活躍を期待して筆を擱く。